

『哲学堂図書』怪談草紙部解題稿

塚 田 晃 信

「哲学堂図書」は、その目録に「怪談草紙部」の一項を立て、和文板本一〇二種（目録では一〇三だが『本朝悪狐伝』の前、後を一として）、漢文板本一二種、写本四五種、計一五九種を収めている。そのほとんどは江戸時代の作品であり、著名なものも少なくない。しかし一方、写本の部を中心として、現在その伝存・流布が極めて稀となっているものもあり、『国書総目録』に収載されていないものもあつて、この種の作品を考究する場合、相応の価値を有するものが含まれているように思う。

この「怪談草紙部」が如何なる基準を以て作品を選んだかは明らかでないが、『日本霊異記』や『古今著聞集』までをも含むことから見て、それは厳密なものではなかったように思われる。この一連の蔵書に対する『国書総目録』の分類も、従つて多岐に亘り、中には「怪談草紙」とはいい難いものも含まれている。今その分類項目の一覧を参考までに掲げておく。

考証	仏教	神祇	雜記	怪談	地誌	風俗	医学	隨筆	俗信	說話	紀行
動物	怪異	注釈	絵画	雜史	戲文	実録	伝記	読本	武家故実		

浮世草子 仮名草子 滑稽本

本稿では、紙幅の制約上、翻刻されたものをまず一括して掲げ（原題・分類項目・刊行書目収載叢書全集名等）、未翻刻のものについては書誌的事項を骨子とし、若干の解題的記述を加えたものもある。配列は「哲学堂図書目録」によらず、板行・書写の年次（不明確な場合は推定時期）順とした。

一、すでに翻刻されているもの

*日本霊異記・古今著聞集は、時代・内容の懸隔から敢て省略した。

1 伽婢子 仮名草子 ○近世文芸叢書・近代日本文学大系・日本名著全集

2 宗祇諸国物語 仮名草子 ○俳諧叢書

3 鬼神集説 神祇 ○増訂佐藤直方全集

4 死霊解脱物語 仮名草子 ○愛媛大学古典叢刊（影印）・変化論（付載翻刻、平凡社選書）

5 狗張子 仮名草子 ○近代日本文学大系・徳川文芸類聚・日本名著全集・古典文庫（現代思潮社）

6 玉簪子 浮世草子 ○近代日本文学大系・古今小説名著集・徳川文芸類聚

7 怪談全書 仮名草子 ○日本名著全集

*本蔵書中の怪談・怪談録とも同一書

8 和漢珍書考 随筆 ○文約一斑

9 諸説辨断 随筆 ○影印日本随筆集成2

- 10 本朝怪談故事 怪談 ○校註索引付翻刻（伝統と現代社）
- 11 当世両面鏡 浮世草子 ○東洋大学短期大学紀要14（改題以前の『和漢乗合船』を翻刻した拙稿）
- 12 鬼神論 神祇 ○新井白石全集・日本思想闘争史料・日本哲学思想全書・日本哲学全書・日本思想大系
- 13 夜光珠 医学 ○日本衛生文庫
- 14 太平百物語 浮世草子 ○徳川文芸類聚・近代日本文学大系
- 15 御伽厚化粧 浮世草子 ○徳川文芸類聚
- 16 御伽空穂猿 浮世草子 ○徳川文芸類聚
- 17 老嫗茶話 雑記 ○続帝国文庫
- 18 諸国里人談 地誌 ○続帝国文庫・日本随筆大成
- 19 英草紙 読本 ○袖珍名著文庫・日本名著全集・有朋堂文庫
- 20 新著聞集 浮世草子 ○続帝国文庫・日本随筆大成
- 21 万世百物語 読本 ○徳川文芸類聚
- 22 天狗名義考 考証 ○医聖堂叢書・未刊稀覯書叢刊
- 23 西播怪談実記 読本 ○松蔭国文資料叢刊・文林
- 24 斎諧俗談 随筆 ○日本随筆大成
- 25 見外白宇瑠璃 滑稽本 ○滑稽文学全集
- 26 復讐奇談 読本 ○東洋大学短期大学紀要10（拙稿）
- 27 江戸塵拾 随筆 ○燕石十種

28 垣根草 読本 ○日本名著全集

29 夜話莊治 心学 ○国民文庫・心学叢書・心学道話全集・随筆集誌・日本道話全集

30 莠句冊 読本 ○日本名著全集

31 闇の曙 随筆 ○日本随筆大成・白蛾全書

32 川童一代噺 読本 ○徳川文芸類聚

33 寒温奇談一二草 読本 ○俄草紙

34 遠山奇談 読本 ○日本庶民生活史料集成

35 奇遊談 読本 ○日本随筆大成

36 稲生物怪録 怪異 ○新修平田篤胤全集

* 本蔵書中の稲亭物怪録も同一書

37 田舎草紙 滑稽本 ○十返舎一九全集

38 近世奇跡考 随筆 ○温知叢書・日本随筆大成・日本随筆全集

39 鬼神新論 神祇 ○新註皇学叢書・新修平田篤胤全集

40 絵本合邦辻 読本 ○帝国文庫

41 北国巡杖記 地誌 ○日本随筆大成

42 北越奇談 ○翻刻(昭和24)

43 塵塚談 随筆 ○燕石十種・温知叢書

44 人狐弁惑談 俗信 ○日本庶民生活史料集成

45 勝五郎再生紀聞 雑史 ○新修平田篤胤全集・日本庶民生活史料集成

46 猿著聞集 雑記 ○滑稽文学全集・日本隨筆全集・日本隨筆大成

47 古今妖魅考 考証 ○医聖堂叢書・日本思想關諍史料・新修平田篤胤全集

48 信濃奇談 地誌 ○日本庶民生活史料集成

* 本蔵書には二本を蔵する

49 不知火考 地誌 ○中島広足全集

50 犬の草紙 読本 ○絵入文庫

51 桑楊庵一夕話 隨筆 ○日本隨筆大成

52 想山著聞奇集 隨筆 ○統帝国文庫・日本庶民生活史料集成

53 靈獸雜記 雑記 ○医聖堂叢書・未刊稀覯書叢刊

二、未翻刻のもの

判型については半紙本以外のもののみ注記した。書名の下には、哲学堂圖書の番号を記した。

1 鬼神俚諺鈔〔わ3左9〕

二冊（改装仮綴じ） 俗信 序（漢文）の中に「茲（三）無禪トイフ者有リ元ト雲水ノ散人ナリ」とあり、この無禪を著者となし得よう。乾坤の二冊に分けた丁数は、乾―上27、坤中―16・下13。刊記に「貞享四年丁卯孟夏吉日 書林・大坂心齋橋順慶町敦賀屋九兵衛判」とある。

なお本書の板心はすべて、「鬼神□□卷之上」（「丁」）となっており、欠字の部分は削り取られたもの、その残存状況から推して「辨話」となっていたであろうことは、ほぼ間違いない。つまり同一内容の「鬼神辨話」の改題本ということになる。因みに『鬼神辨話』は『国書総目録』によると「神祇・雲水山人無禪子著・延宝四版」、そして本書と同年版の「貞享四版」も存在が知られる。

2 本朝故事因縁集（わ3右28）

五卷五冊（但し合綴本） 風俗 外題は打つけ書きで「本朝故事因縁」 丁数（一）序・目次10 本文20・（二）18・（三）20・（四）20・（五）21 刊記は「元禄二巳己歳三月吉辰 江戸青物町万屋清兵衛 大坂鴈金屋庄兵衛板」、なお本書には阿波国文庫・不忍文庫旧蔵印がある。

3 玉櫛笥（わ3中11）

七卷七冊 浮世草子 林義端（文会堂）著 丁数（一）序3 目録3 本文18・（二）19・（三）24・（四）31・（五）18・（六）27・（七）本文26 跋1 序に「元禄乙亥（八年）の冬霜月日 義端謹序」。跋（漢文）に「之ヲ題シテ玉櫛笥ト曰フ猶異ヲ訪ヒ奇ヲ搜リテ嗣テ続編ヲ出ント欲ス草藁未ダ就ラズ姑ク他日ヲ竣ツト爾云」、刊記には「元禄乙亥冬十一月朔旦 京西村市郎左衛門 林九兵衛 江戸西村九左衛門 同半兵衛 同様」とある。

4 たますたれ（わ3左28）

七卷七冊 浮世草子 辻堂兆風子著 丁数（一）序1 本文22・（二）20・（三）22・（四）20・（五）21・（卷六欠）・（七）22 序文に「甲申孟春 城南 挙堂」とあるが、刊記には年月日を欠く（『国書総目録』は「宝永元刊」とする）。

5 大和怪異記（わ4左40）

七卷七冊 怪談 題簽（円形枠の中に「出所付」とあり、その下に）「大和怪異記」。但し第一冊は後人補筆。

第三冊以降は「怪異記」の下に「近世」と小書。刊年は序に「時ニ宝永戊子（六年）ノ冬、無名氏序」とあるのによつて知られる。刊記は年月日を欠き「都合百六箇条 洛陽書林柳枝軒板行」とのみ。丁数(一)16・(二)13・(三)14・(四)16・(五)12・(巻六欠)(七)15

なお哲学堂図書怪談草紙部（以下、本蔵書と略称）中「わ四右43」の『今昔拾遺物語』は、本書の改題本である。

6 有鬼論評註（わ3右8）

一卷二冊 仏教 湛澄述 鸞宿注 美濃本 丁数序1本文42 卷末に「洛北報恩寺隱居 湛澄選 宝永第八龍集辛卯孟夏既望 武浜増上南谿沙門鸞宿謹評注」、刊記には「正徳元年卯年六月上旬 増上寺切通永井町 美濃屋又右衛門開板」と記す。

7 万物怪異辨断（わ4右30）

二編八巻八冊 怪異 西川忠英（如見）編 題簽「万物怪異辨断天異編一（一四）」「同地異編五（一八）」 丁数(一)39・(二)39・(三)34・(四)32・(五)31・(六)38・(七)28・(八)30

第一冊見返しに「崎陽 西川如見先生著 怪異辨断 洛陽書林柳枝軒寿梓」とあり、刊年は跋の「怪異辨断一帙八巻余分テ前後二集ト為シ、前集先ニ梓行シ後集今功畢ル、是ノ故ニ前後合シテ以テ之ヲ世ニ流フ也 天地交参シ怪異褫成ス 誤テ矛盾之有ヲ為スコト矣 正徳五年龍集乙未五月吉旦」によつて知られる。

8 扶桑怪談并述鈔（わ3中20）

七巻七冊（全一冊に合綴） 読本 春鶯著 丁数序2目録（各巻のものを一括）13・(一)17・(二)16・(三)19・(四)22・(五)20・(六)17・(七)16 序のうち作者名・年月日は削除のあとあり 刊記は「寛保二壬戌歳二月十六日 京堀川通

仏光寺下ル町 河南四郎右衛門」とあるが、吉田幸一先生蔵写本が『国書総目録』では「元禄頃写」となっている。

なお本書には「阿波国文庫」「不忍文庫」の旧蔵印がある。作者の春鶯には、本蔵書中の『本朝怪談故事』の著作がある。

また本蔵書中の『本朝搜神記』は本書の改題本（本書の序を削除し、漢文序を新たに付し、その序は「日本搜神記序……明和丁亥（四年）夏小山儀伯鳳撰」とする。内題は「本朝搜神記」とし、本書の「沙門厚督春鶯編」の末尾三字のみ残して削除せしもの）

9 和漢怪談評林（わ 8 中 8）

一冊 写本 怪異 美濃本 題簽に「麻中抄評義 全」とある傍に「和漢怪談評林」と朱書したもの 内容は「和漢怪談評林」が11丁、「二十四孝評判上」26丁半、「神道評判上」23丁半を合綴したもの。奥書に「享保二年霜見月 萩原 勝磐評」とある。

10 新古事談（わ 4 中 41）

五卷五冊 浮世草子 井沢長秀（蟠龍子）著 丁数（一）序1目録2本文18・（二）17・（三）12・（四）15・（五）16 序には年月日・氏名を欠く。

本書は『国書総目録』によれば、他に二、三の伝存が知られるが、本蔵書の板心には「鴨□□一（一五）」とあり、或いは「鴨長明寝覚物語（五卷五冊、仮名草子、貞享二刊）」の改題本などかとも思われる。それかあらぬか本書各巻巻頭の「新古事談」の文字はその部分だけが新しく見える。但し本書の著者を井沢長秀とする『国書総目録』は、その著者別索引で、長秀の著作を四十三編列挙するが、その多くは宝永・正徳・享保期のもので、

元禄以前、さらに『鴨長明寢覚物語』板行の貞享年間まで遡ることは無理なようである。なお後考に俟ちたい。

11 龍神邪説弁（わ8左25）

一冊 写本 神祇 墨付七丁半 内題の下に「掌静翁源高成述」、序には「元文三戊午仲秋望日 河野通秀甫謹叙」とあり、師高成の口述を河野通秀が筆録したものであることがわかる。

12 向燈賭話

一冊 写本 怪談 城南隠士著 縦22.8×横15.8 丁数93

本書は他に伝存あることを聞かない。従ってここに、序を掲げる。

漢文序 耳而見之所以不怪也若以希見則無不疑駭焉所謂信其習見者也古云博學多識有味乎如宋儒則謂怪力乱神君子不語蓋見之小也耳頃者城南隠士著向燈賭話数卷余閱之其事則奇其言則文施之蚩々可以救其敵也則隠士之勉焉豈徒哉豈徒哉隠士名満重我所友者也

和文序 学すして聖衆に向ひ耕すして勘助畑に喰ふは（麻布一隅の小名余か住居）退之か六の外民たるへし間居無レ営毎夜与レ友燈に向ひ話を賭にすれば有レ怪有レ神善惡勸懲其中にあり然共記事述 己 意を以てす懼は僭妄の議を（おのれか）買んと搔遣り捨れば其友欣然と懐にして去ぬ日を経て其草稿に序を乞ふ余か曰く王を讀し国家を知るは賤天稚子たり敢当らざれ共謝すべけんやと因而筆而有しまゝに云レ尔（ひつして）

干時元文己未年十二月

於「麻布北隅」 中村満重書之氣之知「怒仁也」

*『国書総目録・著者別索引』に記す「城南隠士（浪華）」は『安部野童子問（天明六年備後百姓一揆記録）』の著あるも、年代より見て別人ということにならう。

13 本朝俗諺志 (わ 4 中 17)

五卷五冊 (全一冊に合綴)

地誌

菊岡沾涼著

丁数 (一) 24・(二) 19・(三) 19・(四) 19・(五) 21

序に「東都俳林神田藍

染北屋 沾涼述」、本文の末尾に「延享丙寅 (注、三年) 天 米山翁六十有七書」、さらに跋文には「怪談百物語

の類書牛々汗棟に充しかはあれと皆往古の談にして今や現ならず頃日編集ノ五冊者米山翁眼前見亦是其地の人に

委く温問て正説顯然たり夫レ先生ハ多年地理志厚シ故諸国名山旧跡人物奇異及故事因縁普ク日月記月々集し草稿

文箱堆し予これを再三^マてふ止終付劄題本朝俗諺志云爾昔丙寅冬至日東武書林池田二酉堂有ノ俛跋 前編五冊

里人談 次編五冊 俗諺志」これによつて前掲『諸国里人談』と一対の著であることが判る。

14 花鳥百談 (わ 4 左 6)

五冊 静観堂好話著

丁数 (一) 23・(二) 19・(三) 20・(四) 21・(五) 21

序の末尾に「延享五ツの年 辰の春永き日 静観

堂好話述作 京寺町通五条橋上ル西側 梅村判兵衛板行」とある。刊記は欠く。

15 虚実雑談集 (わ 4 中 28)

五卷五冊 読本 恕翁著

丁数 (一) 21・(二) 20・(三) 18・(四) 17・(五) 16

序文に「年月日なく」恕翁」跋文に「寛

延二己巳とし冬 蘭室」とある。刊記「寛延二己巳年冬 江都書林 日本橋一丁目 須原屋茂兵衛板」

16 古今百物語 (わ 4 中 18)

五卷五冊 仮名草子 丁数 (一) 28・(二) 25・(三) 18・(四) 15・(五) 19

序文に「聖人怪をかたらずとは語らざるにはあら

す怪□なるれば也夫天地陰陽ありて五行あり天雷あり地震あり風雨あり霜雪あり人常に見れば怪さるのみ其余の

変異皆造物者の命令なり人常に見ざればあやしむのみ其今の人の怪き事の実事なる物をとつてあげて善行をすす

むると春の曙にしかいふ 日本 説山」とある。跋文はなく、刊記に「寛延四載未正月吉登梓 大坂心齋橋南四

丁目吉文学屋市兵衛 同州安土町入 同源十郎 江戸日本橋通三丁目 同治郎兵衛」とある。なお本蔵書に先立つ延宝四版が『国書総目録』によって知られる。

17 世説雑話 (わ3左22)

二巻四冊 (二冊に合綴) 説話 烏有道人著 丁数(上)29・(下)33 成立は、序の「宝暦癸酉秋九月既望……」また刊記の「宝暦四年甲戌正月……」によって知られる。

*題簽には「百物語上(下)」とあり、その右に後人の手で「世説雑話」と小書。一方、板心は序にのみ「世説雑話序」とあり、巻一・二には欠く。また全四巻を二冊に合綴したことはほぼ確かであるが、上冊の冒頭に「世説雑話乾」末尾に「同乾終」、下冊にも「坤」「坤終」とあり、刊記と併せてその部分のみ刷の新しいことが一見して判然とする。改題本と思われるが原本を詳かにしない。

18 化物判取帳 (わ4右1)

四巻 読本 敬阿著 丁数(一)序3本文13・(二)14・(三)16・(四)14 刊記に「宝暦五乙亥歳正月吉日 江府書亭日本橋四日市万屋彦八 室町二丁目泉屋平四郎」とある。

*横山邦治『享保以後江戸出版書目』には、本書を「全五冊・墨付六十一丁」とし、『国書総目録』も「五巻」とする。本蔵書の四冊本の墨付丁数は確かにそれと一致し、巻四の末尾に刊記も見える所からすれば、両様の板行が行われたものである。山口剛氏の「撰択古書解題」では四巻としている。

19 風流俗説弁 (か1右21)

一冊 戯文 秋吟散人著 丁数34 『国書総目録』は「序文宝暦五」と記載(本蔵書では見られず)。

20 信田白狐伝 (わ3左11)

五卷五冊 読本 誓嘗著 丁数(一)序2 目次2 本文17・(二)18・(三)14・(四)10・(五)10 序には「宝暦七丁丑天夏六月武陽影向山 沙門道阿識」とあり、凡例には冒頭に「誓嘗撰」と記し、さらに「此書は老婆勧誘を本とする故証書を引用せざれども多くは羅山神社考に因る」と『本朝神社考』に基く旨が述べられている。刊記は「寛政二庚戌年求板新校正 河内屋茂兵衛」。なお序文と同年の宝暦七板の存在も知られている。

21 和漢合璧夜話 (わ5中23)

四冊 怪異 上野徳昌 丁数(一)21・(二)16・(三)16・(四)17 序(漢文)には「和漢合璧序」、卷一目錄の題には「古今和漢合璧夜話」とある。刊記は「宝暦九己卯冬 東都書肆 下谷池之端元黒門町 和泉屋仁兵衛」

なお本書については、他に所在あるを聞かない。

22 本朝国語 (わ4左46)

五卷五冊 地誌 矢島酋甫著 丁数(一)20・(二)16・(三)16・(四)16・(五)16 序(漢文)の末は「時維宝暦辛巳之歲中秋上浣撰陽矢嶋酋甫述」、さらにそのすぐあとに「跋」とある和文序の末尾は「干時宝暦十二壬午如月吉旦撰陽浪華隠士」と記す。

23 怪談実録 (わ4右20)

五冊 読本 浪華亭紀常因著 丁数(一)18・(二)17・(三)17・(四)15・(五)16 題簽には「近世怪談実録」、見返しには「古今著聞怪談実録」とある。序に「明和二年乙酉仲冬吉辰 浪華亭 紀常因」とあり、山口剛氏の「撰撰古書解題」では明和三版に刊記を欠くとあるが、文政七版の本蔵書には刊記に「此書はゆゑあつて久しく世にもて遊ばず今其かけたるを補ひ附言して再び発行することゝはなりぬ 文政七甲申秋」とし、次いで「明和三丙戌春刻成 丁子屋半兵衛 文政七甲申求板 前川六左衛門(他)」として、初版の刊記をうかがわしめる。

24 怪談殿居囊 (わ3中6)

五冊 読本 臥仙子文坡著 丁数(一)20・(二)16・(三)14・(四)15・(五)17 序に「江臥仙かつて怪談の草紙を編す題し
てとのい袋と号す披て初篇を見て其書の題する所以を知るかの兼好が草紙や首端つれくゝとあるを題とし此草紙
も第一に宿直ものの袋の事あるをもてなり実や遙き陸奥つくしの噂にとのゐ袋眠を覚し或は下戸と怪物は世にな
しとわやくいふ稚子を警むる一助ともならむか 明和丁亥仲春 赤羅洞主人書」、内題には「怪談とのゐ袋 皇
京 臥仙子 文坡編」とあり、刊記は「寺町通綾小路下ル丁 菊屋長兵衛板 明和五年子正月吉旦」とある。
*なお山口剛氏は「怪異小説研究」で『雨月物語』の「青頭巾」は『とのゐ袋』からとつて「禅座を以て怪を伏
す奥州の禅僧」「魔仏を以て一如とす悟道の聖人、附りすたれし寺を取たてし僧の事」をなしたとされる。

25 狐講釈 (わ5右14)

五冊 高古堂主人著 丁数(一)14・(二)11・(三)10・(四)8・(五)8 題簽には「千歳」と角書、刊記「明和七年とらの
四月吉日 六角通油小路西入ル町 京都書林 小幡宗左衛門校」

26 明和神異記 (わ4中15)

二冊 神祇 外題、第一冊は題簽に「おかげまいり」の角書、その下に「明和神異記」とあり、表紙中央には
後人の筆で「宝永続神異記上之巻」とある。第二冊は題簽に「おかげまいり」の角書、その下に「宝永神異記」
とあり、表紙右に後人の筆で「本書外題かくのごとし、伊勢山田選集(以上角書) 伊勢大神宮続神異記利生 下
之巻也 本書板元の名なし」とあり、さらに見返しに「伊勢大神宮続神異記」とある。刊記は欠くが広告の末尾
に「京都御書物所 寺町通松原下ル東側 菊屋喜兵衛板元」と記す。ちなみに「伊勢大神宮続神異記」は度会
(中西)弘乗著で二巻二冊、宝永三版・元文四版が知られ、『大神宮叢書神宮参拝記大成』に翻刻が収められて

いる。その内容は『おかげまいり宝永神異記』『おかげまいり明和神異記』とほとんど同じである。なお本書の丁数は上31(但し8丁は筆写による補充)、下23。さらに本蔵書には『続後神異記』の写本も存する。

27 怪談無名書 (わ8左22)

一冊 写本 怪談 丁数64 本書は他に存在あるを聞かない。内容は「天狗の弁、仙人の説、俗文鬼神論書、鬼門の弁、傾城之弁、浄瑠璃三味線の説、一角木乃伊の説、七夕二星之弁、一寸向者暗夜の弁、一七日の説、瘡瘡の説、壘之禍福、妖怪の説(朱書)、煙草始り之説、稼に追付貧乏なしといふ事、入梅之説、冥加の弁、窓の月」以上十八項目。なお奥書に「此冊京師□□川明和九辰年耆直□子家治之内稿写するもの也」と記す。

28 本朝奇跡談 (わ3右25)

三巻 地誌 植村政勝著 丁数(一)23・(二)21・(三)23 序文に「安永三年午清明日 東都牛隱竹叢高尚採毫於洛陽錦城寓」とあるが刊記を欠く。なお本蔵書には文政十一版の後刷本も存するが、この方は匡郭ぎりぎりに截断し装幀も劣悪である。

29 妖怪故事談 (わ3中1)

五冊 医学 下津寿泉著 丁数(一)23・(二)31・(三)33・(四)24・(五)25 序には「維時正徳三年冬十月吉日 摂陽下津春抱子 書之翠松軒」、刊記に「安永三三甲午年春正月求板 摂府書林 河内屋柳原喜兵衛」と記す。なお板心には「奇疾便覧」とあり、本書が正徳三年の漢文序を付した改題本であることが判明する。

30 庭の落葉 (わ5右7)

五冊(一冊に合綴) 随筆 西村遠里著 丁数(一)17・(二)12・(三)13・(四)12・(五)12 序に「安永八年己亥夏四月華洛西村遠里述」 刊記は年月日を欠き「京堀川三条下ル町美濃屋治郎右衛門」他の書林名を記す。

31 怪異談叢 (わ5右8)

五卷五冊 読本 伊丹椿園著 丁数(一)15・(二)15・(三)15・(四)14・(五)14 序に「安永八年己亥秋九月穀旦伊水ノ逸民椿園主人書於曉霞樓」、刊記に「天明元辛丑歲五月吉旦(他は書林名)」。横山邦治氏はその著で本書を「翻訳に近い形」としている。

32 雪窓夜話 (わ5右32)

四卷四冊 (一冊に合綴) 読本 金蛇観主翁著 丁数(一)14・(二)11・(三)12・(四)15 序文にいう「友だちと炉を擁して雪の終夜雪門の胡餅を喫し趙州の茶を飲で奇を説怪を語る雪折竹もおびやかされて雨戸あくれば面白や瓊樓玉宇出現して忽に普賢の銀世界ねぐら離るゝ烏までがしろふなつて飛ふ我もいざや帰らんと宵より耳に残りし三が一の物語をかきとどめて兒女等がみやげにせんといふを傍より其端に題して雪の窓の夜話といふ事しかり
安永己亥初春 金蛇観主翁題之」。刊記には「安永八年己亥正月吉旦」とし、書林名を記す。

*なお本蔵書中の『雨夜物語』は本書の改題改装本。寛政九年正月の板だが、他に存在を聞かない。山口剛氏の「選択古書解題」でも『雨夜物語』については記述がない。

33 庚申夜話 (わ8左24)

一冊 写本 玄武庵充方著 丁数24 序文に「安永八己亥二月庚申 玄武庵源充方」とあり、目録は外篇が「庚申待祓、同御本縁拔書、同神号国底立の事、同神号気神の事、同根国底国の事并石男根の事、太田神の事」、内篇が「愚考积氏定規、願望人慾との差別の事、僧俗に言行の差別ある事、庚申賞罰年月日時をいて応驗同に見へる事」となっている。奥書は「文政十三年寅年九月写 大松居毬一」とある。

34 諸国怪談実記 (わ4中36)

五卷五冊 読本 春名忠成著 丁数(一)14・(二)10・(三)13・(四)13・(五)10 刊記を欠くが、裏表紙内側に「安永十年辛丑春三月 大坂書肆 心齋橋南四丁目 吉文字屋市兵衛藏板」と記す。山口剛氏の「選択古書解題」では、「著者春名忠成は国学者で、歌人であつたと見え、敬神の意義を帶し、且和歌に関する事柄の多い点に注意を引く」としている。

35 奇伝余話 (か1右11)

五冊 市衡隠士著 丁数(一)18・(二)19・(三)24・(四)21・(五)16 序を左に記す。

奇伝余話序

曾て駿台の蜉蝣子所著の奇伝新話十五回人間未聴の説を選出せり一朝祝融子のために其草稿を奪れて主人も亦物故せり於是て新話の説一二知る者あつて世間知る者なし去歲江老愛荃軒の主人是を惜しみて辛苦して八回求め得て清録して奇伝新話と号して蜉蝣子の志を残せり余久敷蜉蝣子に知られて新話著作の以前より其新説奇事を聞く事を得て悉く胸裏に記臆す新話の闕略をうらみてみつからはからす聞ける所を考合て漸く七回を著して愛荃軒か八回と合して十五回となしさいさ、か古人こゝろさしをつくしかれとも文章つたなく其意を尽ざる所多ければ奇伝余話と名附て新話に附して全記に備ふらん人文章にかゝわらず其奇を伝へは蜉蝣子か伝物と余か志と共に不朽と尔云

江都 市衡隠士

天明三年癸卯初秋 木俊貞識

*本書は他に伝存することを聞かない。

36 怪異前席夜話 (わ8左27)

二冊 読本 反古齋著 写本 竪^{24.0}×横^{16.6} 丁数(乾)49・(坤)29 序文末に「于時寛政二庚戌春正月 反古齋謹識」とある。本蔵書では写本だが、寛政二版が知られ、山口剛氏は「比較的珍しい話が集っている。奇談中勝れた作の一である」としている(「選択古書解題」)。

37 水月猴話 (わ4中12)

五冊(但し本蔵書は一、三、四のみ) 注釈 田中夢外訳(見返しに「明朝謝肇淛著、本邦田中翁訳」とある) 丁数(一)26・(三)22・(四)24 なお本蔵書中の『通俗五雜俎』は本書の改題本。見返しを改め(「天保十四癸卯秋補刻明朝謝肇淛著本邦田中翁訳 通俗五雜俎全五巻」とある)、内題を直し、板心や巻末の「水口猴話」を削りとするなどし、見返しに「波華書肆北尾春星堂主人識」、巻末の広告の末尾に「浪花書林河内屋平七」と記す。なお『国書総目録』はこの改題本を「弘化三刊」とするが、その記述は見当らない。但し五冊すべて揃っている。

38 怪談旅の曙 (わ5中13)

四冊 読本 波天奈志小浮禰著 丁数(一)16・(二)14・(三)14・(四)15 巻頭の「自叙」に「南海波天奈志小浮禰撰」とある。刊記に「寛政八丙辰天四月」と記す。山口剛氏は全六篇の中三篇を勝れたものとし「併し題材としては珍らしいものは殆んどない。ただ筆に迫力があつて、表現に巧みである」と述べている(「選択古書解題」)。

39 破几帳 (わ5右2)

五巻五冊 読本 流霞窓主人著 丁数(一)17・(二)15・(三)14・(四)15・(五)16 題簽には「奇譚百章」の角書き、内題は「野史種百章」の角書きを伴い、「怪譚破几帳」とある。序には「古御所の破几帳とは名つけはへる流霞窓主人書」とある。刊記は「寛政十二庚申歳正月二日 東都 江戸橋四日市 上総屋利兵衛版」。

40 怪談弁妄録 (わ5中22)

五卷五冊 読本 桃溪山人著 丁数(一)17・(二)15・(三)14・(四)12・(五)11 (一冊に合綴) 序に「寛政庚申季夏 桃溪山人撰」刊記には「寛政十二庚申八月」とある。山口剛氏は「先づ怪説異聞を掲げ、理を解き出所をただし、信ずべからざるを論じ、虚誕を是正するに努めている」としている(前掲書)。

41 席上怪話雨錦 (わ5左29)

四冊 怪異 丁数(一)18・(二)14・(三)14・(四)18 (一冊に合綴) 刊記は「寛政十二庚申歳正月吉辰 江都東叡山麓

下谷町花屋久治郎梓」

42 東遊奇談 (わ4中23)

五卷五冊 読本 一無散人著 丁数(一)22・(二)20・(三)18・(四)19・(五)17 題簽には「諸国奇談」の角書きを有する。板行年次は「寛政十三年歳次辛酉初春」の刊記によって知られる。

43 怪談藻塩草 (わ5中17)

五卷五冊 読本 速水春晓斎著 丁数(一)14・(二)12・(三)11・(四)11・(五)11 序に「寛政辛酉の春 洛東篁亭主人識」刊記には「寛政十三年酉正月」と記す。

44 近世見聞録 (わ8左21)

一冊 雑記 写本(墨付50丁) 内容は「孝心木像の感応、孝女身をうりて幸ひを得、金を主に返して食を延る」など五十四項目に及ぶ。「寛政の頃」などの話を収める江戸後期の書。

45 諸国便覧 (わ4中1)

五卷五冊 怪異 夾撞散人著 丁数(一)12・(二)12・(三)12・(四)12・(五)11 題簽には「奇談」の角書きを有する。序

には「洛北夾撞散人」「享和紀元辛酉」とあり、刊記に「享和二壬戌年正月」と年次を記す。

46 奇談雙葉草〔わ5右24〕

五卷五冊（一冊に合綴） 読本 東男子著・十返舎一九校・画 丁数(一)15・(二)10・(三)11・(四)10・(五)11 見返しには次の如くある。「十返舎主人校 中古奇談雙葉草 全部五冊 世に奇き物語とも多かる中に其意味のふかきをのみ此に模写す尤近世の□□事□なれば其本源を正すに勞せずして悉く希有の証あるを濃かにあらはし其理を詳に記す 享和二壬戌春正月發行」。序には「于時享和二歳戌孟春日 十編舎一九誌」、内題には「奇談雙葉草卷之一 浪華 東男子著 東武 十編舎校」とある。

47 怪物輿論〔わ4中6〕

五冊 読本 十返舎一九作・画 丁数(一)14・(二)12・(三)11・(四)14・(五)11 序には「維時享和三亥春三月 東武橘街逸民十返舎一九誌」とある。刊年は「享和三亥年春三月發行」の刊記で知られる。

*横山邦治氏は『読本の研究』で「一九は読本としては中本もの、それもほとんど仇討ものを作っていた。その初作は「浪花鳥梅」であったが、一九はそれまで読本として深窓奇談五、享和二。怪物輿論五、享和三刊。怪談雨夜鐘六、享和三刊という三部の読本を執筆している。これは発生期読本の奇談ものの余風を受けたもの、白話小説翻案も含むが、平板な怪談集……」と本書に触れている。

48 同契纂異〔か1右28〕

一冊 清水順蔵（東泉）編

本書は流布が極めて稀である。目次を左に示す。「枯木生蓮華、枯木生条、舍利善分増、石尊、無蚊蚋之处、無蛇之地、馬之角、諸鱗化鼠、大南瓜、不客死氣之靈地 右十則」

49 今古奇談〔わ4左1〕

五卷一冊 読本 煙波山人著 丁数(一)18・(二)16・(三)15・(四)15・(五)16 序に「文化紀元甲子十二月 煙波山人識」、刊記には「文化二年乙丑正月穀旦 皇都書寮 五条通塩竈町 北邨庄助 同町 菊屋源兵衛」とある。著者煙波山人の著作は本書のみ。

50 競奇遺聞〔わ5右33〕

五卷五冊 読本 梅翁 丁数(一)14・(二)13・(三)13・(四)14・(五)14 序に「文化第二乙丑夏五月 伏瞻 山中辰仲産撰」。刊記には「競奇遺聞続篇五冊追出 文化二丑年五月 宣許文化第三丙寅春正月成刻 伯耆町 山中勘兵衛」とある。著者梅翁の著作は他にあることを聞かず、山口剛氏も「其人未詳」としている。

51 周遊奇談〔わ3左24〕

五卷五冊 紀行 昌東舎真風著 丁数(一)18・(二)21・(三)20・(四)24・(五)20 題簽は角書きで「諸国奇談」、その下に「漫遊記上(一―下)」。見返しには「東西遊記探奇之余五畿七道著聞之書合三冊」、さらに「天保補刻」「書肆星運堂 柏悦堂」とも見える。序文の「戊子の睦月はしめ」は文政十一年が相当する。以上から見て本蔵書では天保年間の補刻本を有するということになる。なお著者の昌東舎真風(序の「かふちの国人 浦玉斎」は別人か)の著作は本書のみと考えられる。

52 落葉集〔わ8中34〕

十卷五冊 説話 東随舎著 丁数(一)39・(二)34・(三)40・(四)40・(五)35 序の末尾に「善を勧め悪を懲の一助ともなりぬへし」と文化三丙寅年臘月事を閑窓の本にとる事とはなりぬ 斗門西隅 東随舎誌」とある。なお書名には「古今奇談」と角書がある。著者の東随舎は、天明・文化頃の著作が六点認められる。

53 盆石皿山記 (わ5左30)

八冊 読本 曲亭馬琴著 丁数(一)11・(二)18・(三)11・(四)10・(五)18・(六)13・(七)20・(八)13 見返しには「曲亭馬琴作 一柳斎(注、歌川)豊広画」、刊記には「文化三丙寅年皐月上浣著述、同四丁卯年春正月吉日発販 大坂書肆 心齋橋北久宝寺町 柏原屋義兵衛」とある。

*横山邦治氏は「盆石皿山記は「播州皿屋敷」に、何らかの意味で拠っている」「馬琴は文化二年に前編刊行の「盆石皿山記」からすでに単純な仇討ち話から脱却し始め、構想は複雑化して話は長大化する方向に進む」と述べている(『読本の研究』)。

54 鬼情談 (わ5右29)

三冊 読本 秉心堂主人著 丁数(上)24・(中)21・(下)20 見返しの書名には「奇事詳説」の角書きを有する。漢文序の末尾には「神卷敬明書」、刊記には「秉心堂主人著 文化六年巳三月新板」と見える。

*山口剛氏は「選訳古書解題」で本書を「内容は奇談・異聞・郷土的伝説・風俗等まで織込まれ、頗る雑駁である。奇談は狐狸の怪以上に出でず、却て伝説・風俗等に見るべきものがある」としている。

55 赤星草紙 (わ5右25)

三冊 読本 秋里籬島著 丁数(上)21・(中)17・(下)20 序には「文化七庚午としの冬 秋里籬島」とあり、刊記に「文化七庚午秋発行 京都書林永寿軒伊予屋佐右衛門」と記す。

*横山邦治氏は前掲書の中で「赤星草紙」は小説的な作品ではなく、名所図会作者たる籬島らしく諸国見聞の随筆的作品、その「赤星草紙」を除いて彼の創作性を見せた作品はない」と記している。

56 大猫奇談 (わ5中35)

五冊 読本 栗枝亭鬼卵著 丁数(一)29・(二)24・(三)25・(四)22・(五)31 題簽には「犬猫奇談一(一五)」とあるが、内題には「犬猫怪話」の角書きの下に「竹篋太郎」とある。第一巻冒頭に「四国に竹篋太郎てふ犬ありて妖魔を退治せし事色々の説ありて其実をするものなし頃日京撰及東都の諸名君各々筆を揮ふて復讐の種々古きをもて新しき作を出し玉ふ中に独此竹篋太郎は犬の復讐にして諸名家の粕を喰わず真の竹篋太郎なるものならんと誌すは栗枝亭鬼卵にそありける」と記す。

*なお本書については横山邦治氏の『読本の研究』に詳述されている(弼頁)。氏は「猿神退治に結付けて、お家騒動という一層読本的な世界に持ち込んで、それに仇討ちという趣向もからませながら、怪奇趣味も十分に盛り込んで成立した作品」としている。すなわち本書の話は『日本昔話集成』第二部本格昔話一の106犬簪入の民話その他とも一致するとして民話的な要素も重視している。

57 妖怪門 勝光伝 (わ8左23)

一冊 写本 俗言 並木定恒著 丁数30 奥書に「文化三二(四カ)歳戊寅孟春上旬書 並木梅太郎定恒」、第一丁オに大字で「文化十四丁丑正月吉日初詣事珍物記者也 並木梅太郎」とある。多く動物の妖怪について記し、末尾から三丁目には「右四十五ヶ条の内に妖怪に不有事も有りといへども」ともいう。筆跡拙く、行数等も不揃いで粗雑の観がある。

58 玉山画譜 (わ5左17)

二冊 絵画 竪23.0×横12.1 丁数(上)33・(下)22 外題には「法橋」の角書を伴う。内題には「絵本妖怪奇談」とある。刊記には「浪華画工法橋玉山 書林河内屋徳兵衛」と記す。著者初世玉山(石田一、岡田一、尚友)は著作四十八点を数え、その多くは文化・文政期に集中している。本書は「絵本妖怪奇談」の改題本と見られる。

59 近世百物語 (わ 8 左 29)

二冊 写本 怪談 庭仙著 丁数(上)81・(下)75 第一丁オに「都下に住馴しより往事いと□き事、又奇談皆見聞正しきを近世百物語と標題して今つれくを塞かむあきはかなる草稿」と記し、上下合して五十話、挿絵は細密画である。作者庭仙の著作は本書のみが知られる。『国書総目録』では吉田幸一先生蔵の本書を「文化・文政頃写」としている。

60 平児代答 (わ 8 中 33)

一冊 写本 神道 山崎美成著 丁数16 序に次の漢詩を記す。「自出塵寰入玉壺 昇天何日不歡娛 平生伍意如兒戲 人愛其神吾愛愚 庚辰冬日 美成題」、また跋文には「右しるす所は虎舌をかたはらにおきて口づからいふ所をきけるまゝ、筆にまかせかきつけぬ 文政三年かのえ辰の冬かみな月このかの日 山崎美成」とある。著者は別号、久作・北峰・好間堂主人。著作夥しく百以上に及ぶ。

61 奇応記 (わ 5 左 14)

三冊 万歳楼袖彦著 丁数(一)40・(二)39・(三)39 題簽では「四国霊験」の角書を有する。見返しには「万歳楼袖彦先生著 四国霊験奇応記 全三冊 北川周月画 書林舎刻」とあり、冒頭の「口上」に「文政元年寅三月初日筑前博多 太田永蔵 四国処々御札所寺々御知事様 右の書状を八十八ヶ所寺々へ送り遣しける所云々」とある。刊記には「文政八乙酉歲初春発兌」と記す。

62 奇説著聞集 (か 1 右 37)

五冊 写本 読本 大蔵永常著 縦22.4×横15.2 丁数(一)19・(二)17・(三)17・(四)16・(五)18

* 本書には文政十二版・天保十二版の存在が知られている。

63 本朝悪狐伝 (わ5左19)

十巻十冊 読本 岳亭岳山著 丁数(一)16・(二)14・(三)15・(四)14・(五)16・(六)15・(七)13・(八)14・(九)15・(十)15 序に「文政己丑中秋月下に誌す 岳亭岳山」、第五冊末尾に「編者岳亭岳山 画者英斎国景」「文政十二己丑年 書房江戸小伝馬町三丁目 丁字屋平兵衛他」。また第十冊末尾に次の跋を記す。「此書もと赤本にとの需に应じてつゞりたるを稿成るに及んで書肆又よみ本につゞり替ん事をねがふ止事をえず綴り直しぬ然ば巻中くさぐさのことどもかきくはへたれば赤本めかしく戯場めきたる処いと多し見る人その拙きを笑ひ玉ふ事なかれ ○忠義名犬佳話

冊五 これは此書の後へんにて鶴間矢九郎が事ならびに星の井孝蔵小滝等が事室へき太郎が忠をつくせし事を詳にしるす」

64 信州仙人床 (か1右31)

全五巻一冊 写本 伝記 丁数63 序・奥書なし ちなみに目次は一卷が「諏訪城主の事并百姓共一揆の事」など五項、二巻が「立石村次郎右衛門が事并五郎玄衛源五郎刑罪の事」など八項、三巻が「諏訪大明渡^{マツ}助左衛門に合射の事」など八項、四巻が「千野玄庫が母の事并同人ひそかに江戸^{マツ}え出る事」など八項、五巻が「小喜多次郎右衛門吉田宇内方え行事」など七項。計三十六項となる。

65 桃山人夜話 (わ4左35)

五巻五冊 桃山人著 丁数(一)14・(二)14・(三)14・(四)14・(五)14 原題簽「絵本百物語」を見せ消ちにし「桃山人夜話」と記す。刊記に「作者桃山人 画工竹原春泉 金花堂蔵版」、刊年は不明。但し『国書総目録』により天保十二版が知られる。

66 奇説雑談 (わ5右42)

五卷五冊 怪談 生々山人著 丁数(一)15・(二)15・(三)12・(四)13・(五)11 見返しに「東都生々山人著 奇説雜談全部五冊 浪華書林 鶴栖堂製本」、刊記は「弘化五戊申正月 書林心齋橋南五丁目井筒屋和助」とある。

67 大和怪談 (わ 8 中 9)

二冊 写本 怪談 丁数(乾)30・(坤)29 上巻(乾)奥書に「嘉永元戊申年十月廿三日従本目氏借伝写之 服 平貞邦」とあり、他に伝存あることを聞かない。その内容は「武州虎之御門前溜池にて鯉魚昇天之事同図、摂津国大坂御城内にて淀との亡霊御城代と対話之事」など全十一話に及ぶ。

68 破柳骨 (わ 8 中 25)

六冊 写本 随筆 游竜館玩玉編 丁数(一)45・(二)25・(三)40・(四)41・(五)24・(六)28 序の末尾に「嘉永辛亥(注、四年)仲春誌」とある。他の著作は見当らない。

69 北越七奇考 (わ 7 中 6)

一冊 漢文板本 地誌 三宅懿著 丁数18 見返しに「安政庚申春鐫 北越七奇考 汎愛堂蔵版」、序に「安政五年戊午八月 文台鈴木弘撰」、刊記には「汎愛堂蔵版 書房 大阪心齋橋通博労町河内屋茂兵衛(他)」とある。

70 今昔夜話 (か 1 右 2)

五冊 写本 随筆 渡辺源豊著 丁数(一)38・(二)41・(三)35・(四)45・(五)43 本書は他に伝存あるを聞かない。依て左に序を掲げる。

「渡辺の豊ぬしとしころ見もしきゝもしつることゝも物に書つけおきたるをみるにいとめつらしきことおほく人をよきにみちひかたよりにもなりなんかしと思ふにつけてかくのみつかねおきていたつらにむしのすみかと

せんよりは桜木にちりはめて興にひろくせんこそよからめまたみやひ言葉はわらはへなとのよみかたからんにかたはらに俗言をそへたらんかよけんとすゝめけれとおのかゝける文にみつからちうさくをそふることやはあるとうけひかてありしをあなのちにそゝのかしてこたひおほやけにものすることゝはなりぬかくいふはかの豊ぬしにへたてなき友かきなる江口忠房也」。

さらに自序の末尾に「安政のむとせといふ年の渡辺源豊」とある。なお著者の作品で知られるのは本書のみ。

71 瑞兔奇談（わ 4 右 29）
一冊 動物 大畑春国著 丁数 23 刊年は序末の「慶応紀元八月」で知られる。

72 神異紀聞（わ 5 左 12）
二冊 渡辺重春著 丁数（一）33・（二）30 題簽には「近世」の角書、奥付に「明治八年四月四日上板官許」などとあり、「著述人 龍田神社宮司 福岡県土族豊前国中津 渡辺重春」ともある（その他出版人・弘通所などの記述）。

73 本郷怪談実録（か 1 右 29）
二十卷二冊 写本 実録 丁数（上）31・（下）30 末尾に「明治十九年花見月しるす 梅花」とあり、目次の冒頭には「和泉屋久左衛門見世繁昌の事并娘おひでか事」「小松弥六お秀に恋慕の事并和泉屋手代忠七か事」とある。

74 夜窓鬼談（わ 7 中 9）
一冊 漢文本本 石川鴻斎著 丁数 29 凡例の中に「斯編多係伝聞、其真偽固不可証……」とある。著者には安政六年作の「学画楷範」などがある。

75 佐渡奇談（わ 5 中 28）

一冊 活字本 地誌 田中葵園（清） 丁数19 見返しに「故田中美清先生著述 佐渡奇談 明治二十七年八月十八日発行 斎藤活版印刷所」とある。著者には文化年間刊の「佐渡志」などの著がある。

三、年次不明作品

76 奇説雑談集（わ8中15）

五冊 写本（後篇のみ） 怪談 丁数（一）21・（二）18・（三）24・（四）18・（五）19 目次を示せば次の如くなる。（一）三芝居由緒の段・新吉原根元の大略 （二）坂陽任俠文七談話 （三）武州靈巖寺に徘徊せし桑門定西か談 （四）西国浪人今田氏の説話・市森氏芸術の談話・讃州松山浪人の女房怪を産の談 （五）未然を語る僧の談・岡野氏か談話・永井善左衛門か談話

77 怪談秘説（わ8中24）

一冊 写本 怪談 雪月楼主 丁数23 内題に「俚語 怪談秘説 雪月楼主」とある。奥書を示せば「此一冊聖教のいましめにそむき怪力乱神の説といへとも又女色のいましめなきしもあらず予何かしの君より玉はりしかは又何かしのふてかりて写おはんぬ 雪月主人」とあり、年月日を欠く。目次は「桃源之日鯉之登滝之事」「坂城怪異秘説」「金田家怪童之事」「殿中狐狸之事」「吹上御庭怪異之事」「於大奥女中狐を仕留事」「稲葉家怪石之事」「浅草天王橋怪生之事」「菅野谷家奇談」の全九項目となる。

78 諸国怪談集（か1右9）

一冊 写本 怪異 丁数66 本書は他に流布を聞かない。序・奥書ともに欠く。「武江虎御門溜池鯉龍登之事」

を始め、江戸近辺の怪異話三十六話を収める。

79 盲鉄炮 (か1右24)

一冊 写本 怪異 丁数60 本書も他に伝存あるを聞かない。但し本蔵書では巻三・四を収める一冊のみの伝存、虫朽が多い。目次の要目は「人命終シテ並ヒ生スル語 浄土宗日蓮宗之評 人禍除語 後醍醐帝御盛衰之評 (以上巻三) 不二山絶頂ニ湖之池有ル話 二仏之中間ト世俗ニ言フ語 阿波国鳴門之気色之語 (以上巻四)」などがある。

80 近世怪談実録 (か1右32)

二巻一冊 写本 丁数(上)29・(下)33 本書は本稿22の同名書とは全く異なるもので、他に伝存を聞かない。目録は、上巻が「靈元院法皇明御殿怪事・禁裏奇怪之事」など十四項目、下巻が「猫の珍事、同物いひし奇談」など十五項目に及ぶ。

四、漢籍

81 剪燈新話句解 (わ7中1)

四冊 丁数(一)46・(二)41・(三)35・(四)51 刊記に「慶安元年十一月吉日 二条鶴屋町書林仁左衛門(注、矢島玄亮『徳川時代^{出版者}集覧』にいう「林正五郎 京都」) 刊行

82 神異経 (わ7中11)

一冊 丁数16 刊記に「貞享五歲初夏日 中村孫兵衛梓」とある。序・跋を欠く。

83 搜神記 (わ7中12)

五冊 丁数(一)56・(二)62・(三)51・(四)36 (以上搜神記) (五)59 (搜神後記) 後序(日本)の末尾に「元禄己卯五

月端午後一句 一色時棟書_ニ于燃髭齋中_ニ」、刊記には「元禄十二己卯仲夏吉辰日」とある。

84 壬子年拾遺記 (わ7中8)

十卷一冊 丁数全10 「晋王嘉撰 明吳琯校 壬子年拾遺記」の訓点カナ付き板本。刊記に「宝曆二年壬申三月吉旦 平安書林 建仁寺町四条南 中西卯兵衛 四条通寺町西 上坂勘兵衛 蔵版」とある。

85 南秋江鬼神論 (わ7中10)

一冊 丁数17 訓点・送り仮名つき漢文。本文末尾に「孝温著_ニ此論_一始_ニ於壬寅秋_一而今年甲辰始_チ訖_ッ焉」、広告の末尾に「宝曆十一年辛巳春正月校 大坂書肆心齋橋南四丁目吉文字屋市兵衛 江戸書肆日本橋南三丁目吉文字屋次郎兵衛」とある。

86 述異記 (わ7中7)

一冊 丁数39 刊記に「安永四年乙未春正月校正再行 大阪高麗橋一丁目 浅野弥兵衛」とある。

87 譚氏化書 (わ7左32)

三冊 丁数(一)31・(二)14・(三)18 見返しに「嘉永六癸丑求板」「唐紫宵真人選 日本新井白蛾先生校正」「譚氏化書 全三冊 皇都書林文泉堂発行」。序文末尾には「宝曆十庚辰春三月 新井白蛾識」とある。

88 表異録 (わ7左35)

二冊 丁数(上)64・(下)60 表異録の唐本、跋文に「光緒二年(注、明治九年) 丙子夏四月海昌陳其元謹識」とある。

89 東陽夜怪録〔か1右33〕

一冊 写本 丁数31 但し本蔵書は「東陽夜怪録」唐王洙著、陶宗儀輯10丁。「幽怪録」天台陶宗儀記、田汝成撰輯9丁。「語怪」呉 祝允明著 武林朱煒閱12丁。以上を合綴したもの。

90 五朝小説〔わ7中17〕

四十八冊 丁数（略） 唐本

91 博異記〔か1右1〕

一冊 写本 唐の谷神子の纂。序文に「博異記一卷記唐初及中世事或曰鄭還古作按鼉氏云題曰谷神子纂序称其書頗歲規時事故隱姓名或曰名還古而竟不知其姓志怪之書也」とある。

*なお本蔵書は、生物学者丘浅次郎氏旧蔵本である。